

2 野菜

(1) キュウリ

ア キュウリ（夏秋栽培） <露地栽培>

夏秋キュウリは、主に褐色森林土や黒ボク土に属する土壌で栽培されており、物理性や化学性において課題のあるほ場が多い。栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、耕深や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、整枝、摘果、摘葉等適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、過剰施用を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬の利用、雨除け被覆栽培、シルバーポリマルチ栽培、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水、点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 45.6kg/10a以下 (目標収量 11t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ウリノメイガ等) ○対抗植物を栽培する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：べと病等) ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類等の害虫) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：うどんこ病、つる割病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要となる。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ キュウリ（促成・半促成・抑制栽培） <ハウス栽培>

施設キュウリ栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害や土壌センチュウの被害が懸念される場合は、半促成栽培終了後に太陽熱等を利用した消毒を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※前作と併せ年1回の施用とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 促成 32.0kg/10a以下 (目標収量12t) 半促成 32.0kg/10a以下 (目標収量8t) 抑制 20.0kg/10a以下 (目標収量6t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：オンシツコナジラミ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類等) ○対抗植物を輪作する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：うどんこ病、つる割病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) トマト

ア トマト（夏秋栽培） <露地栽培>

トマト栽培ほ場は、黒ボク土壌や沖積土壌に属する土壌が多く、ほ場により土壌の性質が異なっている場合が多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる窒素量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 29.6kg/10a以下 (目標収量 10t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { 対象病害虫：オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病等 } ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○マルハナバチを導入する場合はUVカットフィルムは使用しない。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ トマト（促成栽培）

＜ハウス栽培＞

施設トマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.8kg/10a以下 (目標収量 12t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：オオタバコガ、コナジラミ類〕 〔灰色かび病等〕 ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、コナジラミ類等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵を使用する場合は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○マルハナバチを導入する場合は、UVカットフィルムは使用しないこと。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ トマト（抑制栽培）

＜ハウス栽培＞

施設トマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※前作と併せ年1回の施用とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病虫害：オオタバコガ、コナジラミ類〕 〔灰色かび病等〕 ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、コナジラミ類等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：青枯れ病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵を使用する場合は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○マルハナバチを導入する場合は、UVカットフィルムは使用しないこと。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) ミニトマト

ア ミニトマト（夏秋栽培） <露地栽培>

雨除けミニトマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または養液土耕法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病等 ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：萎ちょう病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ ミニトマト（促成栽培） <ハウス栽培>

栽培土壌は、耕土が深く腐植に富む土壌がよい。このため作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等の施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、養液土耕栽培法を用いる。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や防虫ネットの活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲ワラをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲ワラ 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (目標収量 8 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (<ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：オオタバコガ、アブラムシ類 コナジラミ類、灰色かび病等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：萎ちょう病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20% 削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(4) イチゴ

ア イチゴ（促成栽培） <ハウス栽培>

イチゴは肥料濃度に特に敏感であり、長期間、安定した肥効が重要である。しかし、施設土壌は養分集積が進み、塩類過剰による生育障害が発生しやすい圃場が多い。したがって、完熟たい肥等を施用し、土壌診断に基づく土壌養分管理を行い、肥沃で排水性の良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を用いる。また、施用量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮して決定し、適正な養分濃度とバランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、育苗時は雨除け栽培を行い、生物農薬や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 17.6kg/10a以下 （目標収量 4t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病害虫：ハダニ類、ハンスモンヨトウ アブラムシ類、うどんこ病等） ○ハウスの開口部を防虫ネットで被覆する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ アザミウマ類等） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○育苗はハウス雨除けで行い、降雨による炭そ病の発生を予防する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ イチゴ（半促成栽培） <ハウス栽培>

イチゴは肥料濃度に特に敏感であり、長期間、安定した肥効が重要である。しかし、施設土壌は養分集積が進み、塩類過剰による生育障害が発生しやすい圃場が多い。したがって、完熟たい肥等を施用し、土壌診断に基づく土壌養分管理を行い、肥沃で排水性の良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を用いる。また、施用量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮して決定し、適正な養分濃度とバランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、育苗時は雨除け栽培を行い、生物農薬や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 18.4kg/10a以下 （目標収量 3.5t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病害虫：ハダニ類、ハンスモンヨトウ アブラムシ類、うどんこ病等） ○ハウスの開口部を防虫ネットで被覆する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ アザミウマ類等） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○育苗はハウス雨除けで行い、降雨による炭そ病の発生を予防する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(5) サヤインゲン <露地栽培・ハウス栽培>

サヤインゲンは主に褐色森林土や黒ボク土に属するほ場で栽培されており、物理性や化学性において課題のあるほ場が多い。サヤインゲンは栽培が長期間に及び、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過多を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、雨除け栽培、防虫ネットの被覆やマルチ栽培を行い、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また土壌消毒には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※たい肥は年1回の施用である。また、雨除け栽培の場合は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 1.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○雨除け栽培を行う。（対象病虫害：炭そ病等） ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類、アザミウマ類等） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(6) ピーマン（カラーピーマン含む）（夏秋栽培） <露地栽培>

ピーマンは阿武隈山間地や中通りを中心に栽培されている。この地域の土壌は褐色森林土に属する土壌が多く、排水性・保水性や土壌の腐植量において課題のあるほ場が多い。ピーマンは栽培が長期間に及び、乾燥や施肥量過多は尻腐果の発生原因ともなるので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、保水性に優れた土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を施用するか、局所施肥法を行う。また、施肥量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な土壌養分バランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬の利用、対抗植物によるセンチュウ防除、マルチ栽培や雨除け栽培、防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また土壌消毒には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○秋に稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 ○緑肥作物を栽培する。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を基肥として施用する。 ○局所施肥法(液肥土壌灌水等)を行う。 	化学肥料窒素 成分量 28.0kg/10a (目標収量 5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：オオタバコガ、アザミウマ類、アブラムシ類等) ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○ハウス雨除け栽培を行う。 (対象病害虫：斑点病、疫病) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオニジュウヤホシテントウ、オオタバコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草、疫病) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：ウィルス病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(7) ナス（夏秋栽培） <露地栽培>

ナスは阿武隈山間地や中通りの水田地帯を中心に栽培されている。この地域は灰色低地土に属する土壌が多く、排水性や保水性、地力などに課題のある土壌が多く見られる。ナスは栽培が長期間に及ぶので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、水はけの良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を行う。施肥量は、土壌やたい肥に含まれる窒素量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬や対抗植物の活用、マルチ栽培、雨除け栽培や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 ○緑肥作物を栽培する。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合 は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 36.8kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象害虫：オオタバコガ、アブラムシ類等) ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチウ等) ○雨除け栽培を行う。(対象病害虫：疫病等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオタバコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 現行の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(8) カボチャ <露地栽培>

カボチャは、果菜類の中では強健な作物であり、各種の土壤に適するが、りん酸欠乏の火山灰土壌では活着が悪く、一般的には砂壤土から壤土が適する。また、排水の不良なほ場では疫病や果実の腐敗が発生しやすくなる。このため、土壤診断に基づき完熟たい肥等や土壤改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壤及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、マルチ栽培やしきわらにより疫病の発生を抑える。

雑草防除は、機械除草やマルチ栽培、しきわらにより、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生育初期の被覆資材によるトンネル栽培を行う (対象病害虫：アブラムシ等) ○マルチ栽培を行う。 (対象病害虫：疫病、アブラムシ、雑草) ○熱利用土壤消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壤診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(9) オオバ

ア オオバ（夏秋栽培） <ハウス栽培>

施設栽培のオオバは、1作の栽培期間が4～6か月の長期に及ぶため、肥料切れせず、安定した肥効を持続し、均一な新葉を展葉させるための土壌環境の整備が重要である。また一般に、同一の施設で連続して栽培されるため、土壌への養分集積による生育障害の発生が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、施設内の土壌水分、温湿度、通気などの環境を整え、また、ほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：斑点病、アブラムシ類、雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ オオバ（秋冬栽培） <ハウス栽培>

施設栽培のオオバは、1作の栽培期間が4～6か月の長期に及ぶため、肥料切れせず、安定した肥効を持続し、均一な新葉を展葉させるための土壌環境の整備が重要である。また一般に、同一の施設で連続して栽培されるため、土壌への養分集積による生育障害の発生が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、施設内の土壌水分、温湿度、通気などの環境を整え、また、ほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.0kg/10a以下 (収量目標 1.6t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：斑点病、アブラムシ類、雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(10) ニガウリ（ゴーヤ） <露地栽培>

ニガウリは、栽培が長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、耕深や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、整枝、摘果、摘葉等適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬の利用、雨除け被覆栽培、シルバーポリマルチ栽培、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合 は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水、点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 36.0kg/10a以下 （収量目標 4.5t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病虫害：ウリノメイガ等） ○対抗植物を栽培する。 （対象病虫害：センチュウ等） ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 （対象病虫害：べと病等） ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類等の害虫） ○抵抗性品種・台木を利用する。 （対象病虫害：つる割病等） ○熟利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要となる。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(11) オクラ <露地栽培>

オクラは吸肥力が強く、収穫期間が長いため、保肥力の大きい肥沃な土壤が適する。

このため、土壤診断に基づき完熟堆肥や土壤改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壤及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培などにより発生軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を用いる。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 1.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：ヨトウムシ、オオタバコガ等) ○対抗植物を栽培する。 (対象病虫害：センチウ) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類等) ○機械除草を行なう。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壤診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(12) ダイコン

ア ダイコン（夏どり栽培） <露地栽培>

夏ダイコンは高冷地の畑地に長年栽培されており、連作による病害虫の増加が見られる。また、栽培土壌は淡色黒ボク土壌が多く、物理性、化学性や地力において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

この作型は普通栽培より肥効が良いため、窒素過多により病害発生や品質低下を招きやすいので、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定するとともに、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は生物農薬の利用、対抗植物との輪作、被覆栽培やフェロモン剤の利用に加え、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 12.0kg/10a以下 (収量目標 4.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 〔対象病害虫：軟腐病、アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○被覆栽培を行う。 〔対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：萎黄病等) ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ ダイコン（秋冬どり栽培） <露地栽培>

秋冬ダイコンは畑作地域を中心に長年栽培されており、連作による病害虫の増加が見られる。栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用、対抗植物との輪作、被覆栽培やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg/10a以下 (収量目標 5 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：軟腐病、アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○被覆栽培を行う。 〔対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：萎黄病等) ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(13) キャベツ

ア キャベツ（夏秋どり栽培） <露地栽培>

キャベツは畑作地域を中心に長年栽培されており、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。栽培土壌は褐色森林土や黒ボク土壌が多く、物理性や化学性において課題のある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、対抗植物、フェロモン剤や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ キャベツ（秋冬どり栽培） <露地栽培>

キャベツは畑作地域を中心に長年栽培されており、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。栽培土壌は褐色森林土や黒ボク土壌が多く、物理性や化学性において課題のある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及び堆肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、対抗植物、フェロモン剤や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.8kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(14) ブロッコリー

ア ブロッコリー（初夏どり栽培） <露地栽培>

ブロッコリーは土地利用型作物として長年栽培されており、連作による土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。また、栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体に使用するか局所施肥法を用いるなど過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、輪作に努め、被覆資材による害虫の寄生防止、生物農薬やフェロモン剤等の利用、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○たがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○病害虫防除のために輪作に努める。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ ブロccoliリー（秋冬どり栽培） <露地栽培>

ブロッコリーは土地利用型作物として長年栽培されており、連作による土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。また栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用いる。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、被覆資材による害虫の寄生防止、生物農薬やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を利用する。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (収量目標 1 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(16) コカブ <ハウス栽培>

コカブは都市近郊地帯の野菜として定着していたが、需要が増加し輸送園芸地帯でも周年生産されるようになった。栽培土壌は、砂質土壌が最も良いとされている。また、窒素の肥効が最も大きく、次いでカリであるが生育日数が短いため全量基肥でも良い。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、有機質肥料を使用するか局所施肥法等を行う。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や防虫ネットの活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥(年1回) 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下 (目標収量 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害: コナガ、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害: アブラムシ類、コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病虫害: アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害: 根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは、対象病虫害を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(17) ニラ

ア ニラ（夏どり栽培） <露地栽培>

夏ニラは主に中通りや会津地方の中山間地に栽培されており、連作により土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られる。また栽培土壌は褐色低地土などが多く、物理性や腐植量において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及び堆肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、雨除け栽培、被覆資材の利用、発生に応じた適期防除を行う。また土壌病害防除は太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 56.0kg/10a以下 (収量目標 4 t /10a) ※施肥窒素量は2年 間分の合計である。
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：株腐細菌病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：ネギコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ ニラ（秋冬どり栽培） <ハウス栽培>

秋冬ニラは主に中、浜通り平坦部に長年栽培されており、連作により土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られる。また、栽培土壌は褐色低地土などが多く、物理性や腐植量において課題のある場合が多い。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策や収穫期のハウス換気を行うとともに、雨除け栽培、被覆資材の利用、発生に応じた適期防除を行う。また、土壌病害病除には、太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 54.4kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a) ※施肥窒素量は2 年間分の合計である。
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○株養成期間のフィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：株腐細菌病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：ネギコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 20回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(18) ホウレンソウ <露地栽培・ハウス栽培>

夏どりほうれんそうは主に中山間地での栽培が多く、年4～5回の作付けとなることから、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られ、収量が不安定なほ場が見られる。また、栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性に課題がある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、雨除け栽培、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、被覆資材を利用し、発生に応じた適期防除により行う。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※たい肥は年間当たり 施用量
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 1.2 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：べと病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：べと病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(19) シュンギク

ア シュンギク（抜きとり栽培） <露地栽培・ハウス栽培>

シュンギクは主に施設果菜類の後作として栽培されているため、土壌養分過多になりやすい。土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、生物農薬の利用、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、発生に応じた適期防除により行う。土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

また、雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 2 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○防虫ネットを被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ハモグリバエ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着テープ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ シュンギク（摘みとり栽培） <露地栽培・ハウス栽培>

シュンギクは主に施設果菜類の後作として栽培されているため、土壌養分過多になりやすい。土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、生物農薬の利用、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、発生に応じた適期防除により行う。土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

また、雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 4 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○防虫ネットを被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ハモグリバエ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着テープ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(20) グリーンアスパラガス

ア グリーンアスパラガス（露地栽培） <露地栽培>

アスパラガス露地栽培は会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 40.0kg /10a以 下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病害虫：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 13回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ グリーンアスパラガス（露地二期どり栽培） <露地栽培>

アスパラガス露地栽培は会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。	化学肥料窒素 成分量 45.6kg/10a以下 (収量目標 0.8t/10a)
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病虫害：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 16回以内
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ グリーンアスパラガス（ハウス二期どり栽培） <ハウス栽培>

アスパラガスハウス二期どり栽培は会津地方を中心に水田転作物として栽培されている例が多い。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料、有機質肥料の使用や局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、下葉の整理により通気性を確保し、生物農薬の利用、マルチ栽培、雨除け栽培、発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（点滴液肥灌水等）を行う。	化学肥料窒素 成分量 52.0kg/10a以下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を使用する。 (対象病害虫：ハスモンヨトウ等) ○夏秋期間のマルチ栽培を行う。(対象病害虫：茎枯病) ○夏秋期間のフィルム等による雨除け被覆栽培を行う。(対象病害虫：茎枯病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 18回以内
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ グリーンアスパラガス（伏せ込み栽培） <露地栽培>

アスパラガスは会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 40.0kg/10a以下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病害虫：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(21) ネギ <露地栽培>

浜通りの砂壤土地帯を中心に栽培され、中通り、会津にも栽培されている。栽培年数が長い産地では土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られ、また物理性や腐植量において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、雨除け栽培やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を行い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 25.6kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を使用する。 (対象病害虫：シロイチモジヨトウ等) ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：べと病等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：ハスモンヨトウ等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 16回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(22) 結球レタス <露地栽培>

レタスは、根が土壌の表層に浅く分布し、一般的には砂壤土から壤土の耕土の深いほ場が適する。

また、排水の不良なほ場では菌核病、軟腐病、灰色かび病が発生しやすくなる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、被覆資材の利用、排水対策の徹底、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

雑草防除は、機械除草やマルチ栽培により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg /10a以下 (収量目標 2 t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：アブラムシ、雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 7回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(23) グリーンピース <露地栽培>

グリーンピースは排水の良い壤土や粘質土壤に適し、県内では県北地方や会津地方の畑地帯で主に栽培されている。直根性であるため、土壤は膨軟で、通気性に富み、作土の深いほ場が適している。

また、グリーンピースは連作を嫌い、生育不良から収量が低下し易いため 4～5年の休閑をとることが望ましい。このため、他野菜との輪作体系をとるほか、土壤診断に基づき完熟たい肥や土壤改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。特に実エンドウで収穫することから、草勢を落としやすいため、追肥は遅れないよう注意し、施肥量は土壤及びたい肥に含まれる量を考慮しながら窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壤灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (収量目標 2 t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する (対象害虫：うどんこ病、灰色カビ病) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壤診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(24) サヤエンドウ (スナップエンドウ含む)

<露地栽培>

サヤエンドウは排水の良い壤土や粘質土壌に適し、県内では県北地方や会津地方の畑地帯で主に栽培されている。根は深根性で滞水には極めて弱く、排水不良地では枯れ上がりや病気の発生が多い傾向にある。

また、連作を嫌い、生育不良から収量が低下し易いため 4～5年の休閑をとることが望ましい。このため、他野菜との輪作体系をとるほか、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (目標収量 1.0t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する (対象病害：うどんこ病、灰色かび病、ヨトウムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：うどんこ病等) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(25) 未成熟ソラマメ <露地栽培>

ソラマメは根の酸素要求量が多く、また水分の要求度が高いため、通気性、排水性が良く、保水量のあるほ場条件を整備することが必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 9.6kg /10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：うどんこ病、灰色かび病、ヨトウムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(26) タマネギ <露地栽培>

タマネギは土壌適応性は広いが、好適pHは6.3～7.0程度で微酸性～中性土壌が適する。肥大開始以降は土壌水分を多く必要とする。根は好気性で表面に張り、過湿状態では生育が阻害される。また、球の肥大には、生育初期から肥大開始時に養分が欠乏しないことが必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：灰色かび病、ヨトウムシ等) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 13回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(27) ミズナ <露地栽培・ハウス栽培>

ミズナは土壌適応性は広いが、商品化率を高めるためには葉柄が細く、株の揃いが良好なことが重要である。そのため、肥効が安定し保水力のある土壌条件を整備することが必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や被覆資材の利用、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：コナガ) ○防虫ネット被覆栽培やべたがけ栽培を行う。 (対象病虫害：コナガ、アブラムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 3回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(28) 未成熟トウモロコシ <露地栽培>

トウモロコシ栽培は、土壌適応性が広いものの、砂地及び重粘土を除く、肥沃な土壌が適する。作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等の施用し、土作りを十分に行うことが重要である。また、吸肥力はきわめて強い。栄養生長期には吸収量は少ないが、節間伸長が始まると急激に増加する。窒素はそのころからしだいに吸収量を増し、登熟初期頃まで非常に多くなり、成熟期に最高となる。リン酸は成熟期までゆるやかに吸収され、カリは生育初期から絹糸抽出期までに吸収量が多い。したがって、施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用する。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、マルチ栽培やべたがけ栽培を活用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (目標収量 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培を行う。 ○生育初期にべたがけ栽培を行う。 (対象病虫害：アブラムシ類) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(29) エダマメ <露地栽培>

エダマメは、土壌への適応性は広いが、酸性土壌はきらい、最適pHは6.0～6.5である。また、乾燥や過湿条件では着莢不良、子実の肥大不良等をおこすため、保水力が高く肥沃な土壌が適する。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や被覆栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 1 t/10a 稲わら 0.5t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 6.4kg /10a以下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：灰色かび病、ヨトウムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○被覆栽培を行う。 (対象病虫害：ダイズサヤタマ、バエ、カメムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(30) アサツキ

ア アサツキ <露地栽培>

栽培土壌は、掘り起こし水洗いするので土の落ちやすい土壌が良い。

したがって、たい肥は前作物の栽培で十分施用し、アサツキ栽培時には収穫後の水洗い時にたい肥が根についていると作業が困難となるので施さない。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、土作りを十分に行うことも重要である。

施肥には、肥効調節型肥料と有機質肥料を使用する。施肥量は土壌に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や生物的防除剤の活用、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥 (前作で) 1 t/10a 稲わら (前作で) 0.5 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 35.2kg/10a以下 (目標収量 0.75 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害: ヨトウムシ類) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用 (経歴) ごとに合計した数である。

イ アサツキ <ハウス栽培>

栽培土壌は、掘り起こし水洗いするので土の落ちやすい土壌が良い。

したがって、たい肥は前作物の栽培で十分施用し、アサツキ栽培時には収穫後の水洗い時にたい肥が根についていると作業が困難となるので施さない。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、土作りを十分に行うことも重要である。

施肥には、肥効調節型肥料と有機質肥料を使用する。施肥量は土壌に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や生物的防除剤の活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥 (前作で) 1 t/10a 稲わら (前作で) 0.5 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 35.2kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ヨトウムシ類) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ネギハモグリバエ) ○太陽熱・蒸気・熱水を利用し土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(31) ウド（伏せ込み栽培） <露地栽培>

ウドは土壌の適応性は広いが、充実した根株を養成するためには湿害、乾燥害の影響が少なく、排水が良好で肥沃な土壌が望ましい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0 kg/10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：センノカミキリ、ヨトウムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。 (対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(32) ゴボウ <露地栽培>

ゴボウは特に湿害に弱く、排水がよく耕土の深い肥沃土が適する。県内では灰色低地土である河川沿岸の沖積地で表土の深い壤土や砂壤土で品質の優れたものが生産されている。また、連作や酸性土壌では生育が不良となるため、他野菜との組み合わせによる輪作を行うようにするほか、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 （収量目標 2 t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する （対象害虫：ネコブセンチュウ、ヨトウムシ類） ○機械除草を行う（対象：雑草）。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(33) ニンジン

＜露地栽培＞

ニンジンは、種子の吸水力が弱いとため土壌が乾燥すると発芽率が低下し、また過湿状態でも発芽不良となる。また、作土層が浅い場合や緊密な土壌では岐根が発生しやすく、生育後半の多湿条件では裂根が発生しやすくなる。良質のニンジンを生産するためには、保水力があり排水良好で作土が深いほ場条件を整備することが必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.8kg/10a以下 (収量目標 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヨトウムシ類、ネコブセンチュウ) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：キアゲハ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(34) バレイショ <露地栽培>

県内全域で栽培されており、砂壤土や壤土での作付けが多い。物理性や腐植量において課題のあるほ場が多く、また栽培年数が長いほ場では病害虫の増加が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、マルチ栽培により疫病の発生を抑え、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除は、マルチ栽培や機械除草により行い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.8kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：疫病、雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(35) サトイモ <露地栽培>

サトイモの栽培土壌は、砂質土壌から埴壤土までと広く適応する。また、窒素は子いもの数を多くし、カリはイモの肥大に大きく関係する。さらに、栽培期間が長く乾燥に弱いため、たい肥の施用効果が高い。したがって、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥を行う。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬の活用やマルチ栽培を行うなど、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (目標収量 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害：ハスモンヨトウ) ○マルチ栽培を行う (対象：雑草)。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 2回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(36) ナガイモ（ジネンジョ含む） <露地栽培>

ナガイモは、イモの肥大・伸長が長さ1mほどに達する場合があります、一般に地中に垂直に伸長するため、耕土深の深いことが必要である。また、イモの形状に対する土壌条件の影響が大きく、砂土や火山灰土など軽しょうな土壌で形状のよいものが生産される。また、土壌が膨軟な場合は形状が良く、硬い土壌では曲がりいも、扁平いもが発生しやすく、排水が不良で滞水した場合は岐根イモの発生が多くなる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、トレンチャによる深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 2.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヤマノイモコガ、ヨトウムシ類、ハスモンヨトウ) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(37) ヤーコン <露地栽培>

ヤーコンは、草丈が高く、葉が大きいいため、水分を多く必要とする。反面、土壌の過湿を嫌い、排水不良地、特に梅雨期に滞水するような土壌条件では、地上部の生育も悪く、塊根も腐敗しやすくなる。大きく良質な塊根を生産するためには、排水が良く、有機質に富んで保水性のある耕土の深い（最低15cm以上の）畑が望ましい。このため、できるだけ条件の整った畑地を選定するとともに、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や機械除草、マルチ栽培などにより発生を軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：コガネムシ類幼虫、ハスモンヨトウ) ○機械除草を行う。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(38) なばな類 (オータムポエム、くきたちな、こうさいたい、さいしん、つぼみな、なばな等)

＜露地栽培・ハウス栽培＞

なばな類は、土壌適応性は広いが、浅根性なので透水性、保水性、通気性の確保が重要である。また、施設果菜類の後作として栽培されることが多く、その場合は土壌養分過多になりやすい。

このため、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、べたがけ栽培、マルチ栽培などにより発生の軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 9.6kg/10a以下 (収量目標 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行なう (対象病虫害：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○機械除草を行なう。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○ハウス栽培では熱利用土壌消毒を行なう。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(39) コマツナ <露地栽培・ハウス栽培>

コマツナは、土壌適応性は広いが、直根が伸びるので土壌の排水性、保水性、通気性の確保が重要である。また、ハウスでの連続栽培や施設果菜類の後作として栽培されることが多く、その場合は土壌養分過多になりやすい。

このため、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、べたがけ栽培、マルチ栽培などにより発生の軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を使用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以 下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行なう。 (対象病害虫：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○機械除草を行なう。(対象病害虫：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病害虫：雑草) ○ハウス栽培では、熱利用土壌消毒を行なう。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 2回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(40) ニンニク <露地栽培>

ニンニクは土壌適応性は広いが、好適pHは6.0～6.5程度で微酸性～中性土壌が適する。生育には、長い日数を必要とし、肥沃で耕土の深い畑が適する。球が肥大する時期には、特に水分が必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：さび病、ヨトウムシ等) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：春腐病等) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(41) サツマイモ

サツマイモは、土壌適応性は広いが砂土や壤土が適する。また、膨軟で通気性が良く、耕土の深い（40cm以上の）畑が望ましい。pHは5.0～6.0程度の弱～微酸性土が適する。

窒素は地上部の生育、カリはイモの肥大に大きく関係しており、窒素過剰により、茎葉が過繁茂となり、イモの肥大不足や品質低下につながる。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 	たい肥 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 2.4kg/10a以下 (収量目標 1.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術 ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ハスモンヨトウ等) ○対抗植物を利用する。 ○天然物質由来農薬を利用する。 ○フェロモン剤を利用する。 ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。